その日の夏

三枝和子

講談社

その日

三枝和子

三枝和子（さえぐさかずこ）　昭和4年3月31日神戸市に生まれる。兵庫師範学校本科を経て、関西学院大学文学部哲学科卒。

昭和45年『処刑が行われている』で第10回田村俊子賞受賞。『鬼どもの夜は深い』で、昭和58年第11回泉鏡花賞受賞。

最近の著書に、『崩壊告知』（新潮社）、『曼珠沙華燃ゆ』（中央公論社）、『光る沼にいた女』（河出書房）、『幽冥と情愛の契りして』（講談社）等。

その日の夏

昭和62年5月30日　第1刷発行

著　者　三枝和子
発行者　野間惟道
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二―一二―二一／郵便番号一一二
電話東京（〇三）九四五―一一一一（大代表）
印刷所　豊国印刷株式会社
製本所　株式会社黒岩大光堂
定　価　一三〇〇円

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取替えいたします。
© Kazuko Saegusa 1987 Printed in Japan

ISBN4-06-203163-9(O)〔文1〕

その日の夏

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

八月十五日

正午に向って、時間が奇妙にゆっくりと流れていた。時間の流れが、時計とは異質の時の刻みかたをし始めたことを私は全身で感じとっていた。

蟬の声ではない。物の煮えつまる音だった。じいじいと。

身体が煮られているのかもしれない。幻聴を聞いているようで、低く執拗な響が耳の奥から湧いて来て血のなかへ溶けて流出して行く。音が外から聞こえて来るのではなく、内側から押し出されて来る。

怯えているのではない。怯えているのではないのに身体の震えを止めることができない。目の前に真白な布のようなものが垂らされて、これは何だろうと凝っと睨むのだけれど、真白な布の向うにはあっけらかんとした空間が無限に拡がっていそうで、ついと手を伸ばしてその布切れを持ちあげることをためらう何かがある。呪文にかけられたように、その真白な布の前に

一人座って身じろぎもしないでいる。

その日と、その前の日の続き工合は、はっきりしない。その日と、その後の日の続き工合もはっきりしない。その日だけが前後と切り離されてあるはずもないのに、互いにそれぞれ繋りが断ち切れてしまった果ての、ぽかんといち抜けた空白で、斬首の罪人の顔の前に垂らされる白い布のなかの視野みたいに、変にうす赤く何も見えず、それでいて後頭部に全神経を集中して、何も彼もをすっかり見尽くそうとしている。

その視野のなかで、夾竹桃（きょうちくとう）が咲いていた。夾竹桃は赤い血の色の花だ。梢から噴き出すようにして咲いていた。その日は、その夏の日には、夾竹桃しか咲かなかった。夾竹桃だけが、風も無いのに、梢のなかで大きく前後左右に揺れながら、次から次へと幾叢もの場所を埋めて咲き続けていた。

朝から暑い日だった。太陽は無かった。入道雲のぶあつい襞のなかから、鈍い銀色の光が洩れて瞼を刺した。

しんと静まりかえった真昼だった。誰もが物音ひとつしない時間のなかで、互いの呼吸を聞いていた。朝から暑かったのに、その時間の、そのあいだだけ、汗が引いていた。汗を拭いた

覚えがなかった。

そのとき、私は十六歳だった。

遠くに響いていた女の声が次第に大きくなる。大きくなるにしたがって意味が聞こえて来る。努めて冷静さを保とうとしている気持までが伝って来る。廊下を流れて近付いて来て入口の前で停る。音楽の久永教官である。

「正午に重大放送があります。午前中の作業を十一時四十分に終え、片付けしないでそのまま廊下に並びなさい。整列したらクラス毎、講堂に入場しなさい」

背伸びして何かを読みあげるように早口に伝えると急ぎ足で去って行く。通り過ぎてから隣のクラスにも同様のことを告げている声が再び聞こえて来る。

何だろう。

しかし誰も何も言わない。顔を見合わす者もいない。いっとき休んだミシンの音が前にも増して高くなる。生徒たちは、まだ互いによそよそしい。入学してから丁度半月である。作業中は私語が禁じられているし、昼休みも殆んどない。クラス全員、名前のはっきりしない者同士も多い。

H師範学校本科女子部。

三月、それぞれの女学校を卒業した生徒たちは、身分を進学した学校に置きながら、引き続き動員の軍需工場で働き、四ヵ月後に職場を離れるという非常時の態勢で、この八月一日、入学して来たばかりである。

全員が揃って、ではない。四ヵ月の入学繰延べ期間中に、家が被災した者からは休学届が出ている。動員先の工場で罹災死した生徒もいる。

H師範では教員養成学校の特別の措置で校内作業が許され、午前中は海軍省委嘱の軍服縫製、午後には授業がある。医学関係は別にして、女子の専門学校及びそれに相当する学校で授業があるのは異例である。

重大放送って、何だろう。

ひょっとしたら、と胸のなかを走って過ぎるものがある。不安、ではない。むしろ不吉な予感。私はすでにそれを知ってしまっているのではないかという……。しかし口に出して言えることではない。胸は激しく音をたてて鳴り出したが、まとまりのつかないその気持を打ち明けて語るほど親しい友をまだ持ってはいない。

「十一時四十分」

誰かが、そのときまで秒読みをしていたとも思える、せっぱ詰った声をあげる。

一瞬、ざわめきが拡がりそうになり、すぐ納まり、生徒たちは一斉に立ちあがる。小学校の

頃から訓練されている集合時の心得である。口を閉じ素早い動作で廊下に並び、階段に近いクラスから動き出す。

講堂は雨天体操場を兼ねている。入学式はここに椅子を並べて行われたが時間割の関係で、まだ体操場として使用してはいない。いまは、だだっ広い板間である。正面の壇上に日の丸が下げられ、その前にラジオが置いてある。小さなラジオである。拡声器の部分が一つ目のようにこちらを睨んでいる。

「座れ！」

号令がかかる。

――座れ？

軽い戸惑いが生徒たちのあいだに起る。座りながら顔を見合わせる者もいる。椅子もないのに、このまま直かに？　女学校なら板の間に座るのは武道の時間だけである。

「静かに！」

修身公民の井口教官が怒鳴る。男にしては細い声が少し掠れている。「ただいまから戦局について、畏くも天皇陛下おんみずから重大な放送を遊ばされる。各自拳々服膺し奉るよう」

言い終ると侍みたいに武張った恰好で床に座る。続いて両脇の教官たちも次々に座る。講堂のなかが、しん、と静まりかえる。最後に、講壇脇の扉から学校長格の女子部部長が入って来

る。

部長先生の顔を見るのは入学式以来である。白いワイシャツを着ている。入学式のときは黄土色の国民服だった。外出時にはグラマンの機銃掃射から身を守るため、決して白い服を着てはならない。部長先生は講堂に入る前に着替えたのだろうか。特徴のある大きな目玉を右左に動かしたので、何か話があるのかと思ったら、ぎょろり、ぎょろりと全体を見渡しただけで、一言も言わず背を向ける。そのまま講壇のラジオを振り仰ぐ恰好で土下座する。

ひどく長い時間が流れる。

誰かが咳を我慢しているらしい。押し殺した微かな呻き声が洩れるが、それも一瞬である。講堂は二百人近くもの若い女生徒たちがいるとは思えないほど、真夏だのに脳天の冷たくなるような気配が漲っている。

正午。

ラジオから雑音混りに「君が代」が流れて来る。部長先生の大きな身体が、さあっと前へ倒れる。つられて私も、さあっと身体を前へ倒す。額を床にこすりつける。傍き見したわけではないが、二百人の生徒たちが一斉に平伏した様子が伝わって来る。

「君が代」のあと、ラジオがざわざわと雑音をたてる。しばらく雑音が続き、雑音のなかから天皇の声が聞こえ始める。初めて聞く天皇の声である。天皇の声は、少し震えて甲高い。とこ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ろどころ雑音のために掻き消え、漢語の意味に難解なのが混っているが、大意は、ほぼ完全に聞きとれる。戦争が敗けて終ったことを、私は額を床にすりつけた姿勢のなかで確認している。

放送が終り、一瞬の沈黙がある。そのときになって初めて、窓外の蟬の声が聞こえて来る。どこからともなく湧く啜り泣きの声も聞こえて来る。目の前の部長先生の背中が大きく波打ち、いつのまにか私自身も泣き声を出している。周囲の低い泣き声が、突然、爆発するみたいに大きくなり号泣に変る。その号泣の輪のなかに、すっぽりはまって身をよじって泣いている……。

どれほどの時間泣いていたろう。尾を曳く啜り泣きの合い間にしゃっくりや鼻をかむ音が混る。やがて、それも納まり突然に訪れる静寂。

部長先生が立ちあがる。ハンカチを取り出して目と鼻を拭いてから、大御心を体し、冷静に行動すること、何らかの指示があるまで各自の作業場へ戻って仕事を続けるよう、と指示する。

「一組、起立！」

号令が掛けられる。号令は心なしか元気がない。生徒たちは俯き勝ちに順番に立って講堂を出て行く。痺れを切らした足がふらつく者もいるが誰も笑わない。廊下を渡り、作業場にあて

られている教室に戻るまで口を利かない。

本科一年五組の作業場は二階、窓際に置かれている電動ミシンが私の分担である。ミシンの椅子に腰掛け、ぼんやりと窓の下を眺める。窓の下は夾竹桃の花盛り。夾竹桃の向うには再度の空襲に曝されたA市の焼野原が拡がっている。H師範は山手にあり、辛うじて類焼を免かれたが、火の手を喰い止めた国鉄の線路が境になり、それより南は一望の瓦礫である。窓から海まで、視野を隔てるものがないので、海は手でも掴めそうに近い。

――ほんとうに敗けてしまったのかなあ。昨日まで、あれだけ勝つ、きっと勝つと誰もが言い続けていたのに。

ふと気がつく。さっきから手がまるで動いていない。同時に部屋のなかの話し声がいちだんと高くなる。振り返ると、誰も作業などしていない。裁ちかけの布の山を後ろにして、裁断台の周囲に十数人が群れている。電動ミシンを使っている者も、椅子の向きを変えてしまって、互いにひそひそ話しあっている。

「だって、無意味じゃない」

突然、大きな、はっきりした声が響く。寮で同室の宇田典子、猫のような丸い目をした大柄な美少女で、地方出身者の多い師範学校のなかでは、都会育ちのきびきびした物腰も手伝って、いちだんと垢抜けて目立つ生徒である。

「戦争が終ったというのに、何故、こんな作業を続けなければならないのよ」
宇田典子は、持ち前の大きな身振りで教室全体を見廻す。
「でも、差しあたって、何もすることがないから……」
反対側から小さな声がする。副級長の予科出身の森寿美子である。師範学校は、以前は一部と二部に分れて居り、高等小学校から予科に入学、三年を了えて本科に進むものを一部と言い、女学校から本科に入って来る者を二部と呼んでいたが、私たちが入学した年から制度が変り、本科一本になり、予科卒も女学校卒も、一緒のクラスに編成されたのである。予科卒には、家から通える距離に女学校が無い地方在住者が多く、郡に三人とか、五人とかの割合で進学して来る向学心に燃えた地味な生徒が大部分である。二週間ほどの生活だが、全寮制で朝から夜までずっと一緒に暮しているうち、予科出身者と女学校出身者の、微妙な肌合いの違いも分り始める頃である。その両極端の代表格の二人が、きっと互いを見据えたので、私は思わず中腰になり、それから慌てて座り直す。双方を取りなす言葉が浮んで来なかったのである。
「何もすることが無ければしなきゃいいじゃない」
宇田典子は突っかかるように言う。
「だけど、部長先生が、何らかの指示があるまで仕事を続けるよう仰言ったじゃない」
森寿美子の声は低いけれども、一つ一つ、自分に言いきかすみたいに力がこもっている。

「敗けてしまったのに……」
宇田典子は、さらに押っかぶせるように叫ぶ。「戦争に敗けてしまったのに、今更、何をするのよ」
「戦争、敗けたんでなくて、終ったんでしょう」
誰かが覚束ない声で言う。「敗けたなんて、そんな……」とあとは唇のなかでぶつぶつと消える。
「そうよ、終ったのよ」
宇田典子は肩を聳やかす。「でも、まさか、勝って終ったわけじゃないでしょ」
「……」
みんなは何も言えなくて口を噤む。宇田典子は少し蒼ざめて叫ぶように言う。
「勝って終ったのなら、何で、私たち、あんなに泣いたのよ。誤魔化さないで」
「でも……」
森寿美子が何か言おうとしたとき、昼食を知らす鐘が鳴り、みんなは救われたように立ちあがる。すでに一時半を過ぎていた。
随分遅い昼食なのに、誰も意に留めてはいない。誰も彼もが少しずつ上の空で、食堂に集って来る顔の幾つかは、泣き腫らした赤い目をしている。

食欲は無い。いつもは余計空腹を刺戟するのが恨めしい食堂当番自慢の味付高粱飯が、奇妙にぱさぱさして喉を通らない。もちろん食べない者はいないが、誰もが浮かぬ顔で箸を動かしている。

食事中に寮監長が入って来て、とりあえず今日の午後の授業は無い、各自、寮の部屋で休息するなり自習するなりして待機するよう、明日以後のことは決定次第通達する、と手短かに説明して、いつもは一緒にする食事を摂らないであたふたと出て行く。

生徒たちは箸を宙にとめたまま、少しのあいだ茫然とし、それから急いで残りの高粱飯を胃に納め、一人、二人、とテーブルを離れる。ふだんは必ず笑い声のあがる食堂だのに、恐怖のグラマンの機銃掃射を逃れて帰ったあとでさえ、必ず笑い声のあがった食堂だのに、本当にひっそりと誰も笑わない。

もう爆撃されることもない、ふと、そう思った。ほっとして、それが何だか妙な気分だった。

A市は、郊外に航空機工場を持っていたため、一トン爆弾による攻撃と再度にわたる焼夷弾投下の洗礼を受けていた。もうこれ以上爆撃はあるまいと思われるほど破壊された町だが、それでも空襲警報が鳴って避難するときに、気まぐれみたいに飛来する機銃掃射専門のグラマン

の襲撃に遭ったりした。向うは気まぐれでも、こちらは本能的に必死で逃げ廻った。特に八月六日以降の空襲のときは恐しかった。広島で凄い爆弾が投下された、何でも光を見ると駄目らしい、編隊を組まないで一機か二機、ふらふらやって来ても油断してはいけない、などという情報が飛びかった。避難のときはコの字形の防空壕の奥の部分に先を争って逃げこんだりした。逃げこみながら、国のためには、いつでも生命を捧げる覚悟なのに、これはいったいどうなっているんだろう、と自分自身の意識をいぶかったりした。

無駄死をしないでおこうという気持、でもなかった。無駄死という考は、一度も思い浮かばなかった。死ぬ覚悟、死ぬ覚悟、とお題目みたいに唱えていながら、具体的に死ぬことなど一度も考えなかった。鼻先に爆弾が落ちても、恐いだけで、死ぬなどとは思わなかった、思えなかった。生理が停まったり、不順になったりはしたが、どこかで、自分では気付かない図太い生きかたをしていたのかもしれなかった。新聞の報道とは別に、凄い爆弾のことや、降伏を勧告するビラが撒かれたなどという情報は、避難のときに囁やかれる市民のひとたちの声のなかから敏感に聞きとっていた。動物たちが身の危険を察知するときのように、人間なりのアンテナを張りめぐらして周囲の状況を摑もうとしていた。勝つことを本当に信じていて、全くそれを疑っていない愛国少女だったけれども、何の力でか、日本が敗けることも予感していた。本能の力かも知れなかった。自分の身体のなかに、一すじ、地下水みたいに流れていた予感が

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com